農 業 技 術 情 報

令和７年５月 15 日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ十勝池田町　572-3131
高島支所　573-2111
池田町農林課　572-3118

農作物の成育･作業の遅速（5月 15 日現在）　（ ）内は平年値

作　物　名	遅速日数	生　育　状　況		農作業状況
秋まき小麦	+3	草丈　42.7 (35.5)cm 茎数 1,340 (1,418)本/㎡	幼形期 4/26 (4/28) 止葉期　(5/23)	
ばれいしょ	－			植付始 4/27 (4/24) 植付期 5/ 8 (4/28) 植付終 5/　(5/ 6)
大豆	－			は種始 5/11 (5/11) は種期 5/　(5/14)
てん菜(直播)	－		出芽期 5/　(5/11)	は種始 4/27 (4/19) は種期 5/ 6 (4/26) は種終 5/14 (5/ 1)
牧　草	+2	草丈 38.3 (33.4)cm	萌芽期 4/ 8 (4/ 8)	
サイレージ用とうもろこし	－			は種始 5/11 (5/10) は種期 5/15 (5/14)
たまねぎ	－	草　丈 13.3 cm、 生葉数 2.63 枚 葉鞘茎 4.28 mm		移植始 5/ 5 移植期 5/ 9 移植終 5/

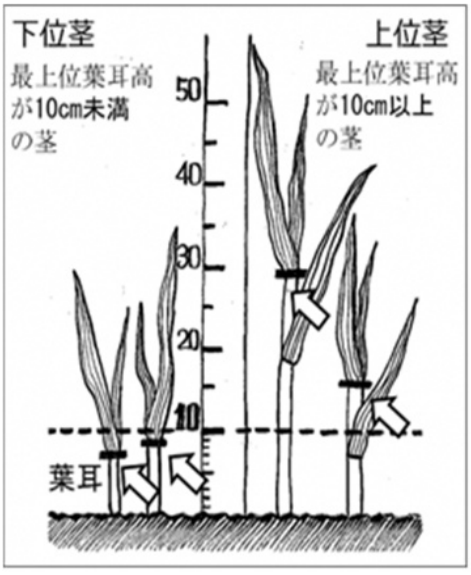
＜秋まき小麦＞

１ 止葉期以降の窒素追肥

止葉期から開花期の追肥は、止葉期の４kg/10a を基本として、合計窒素追肥量は７kg/10a が上限になります。

止葉期以降の窒素追肥は収量・歩留まり率向上に有効である一方、過繁茂時や過剰な窒素追肥量を施用した場合は、倒伏の危険性が高まります。

ほ場ごとの生育に応じた追肥量や方法を判断して窒素追肥を行ってください。



＜上位茎数 900 本/㎡未満の場合＞

①止葉期に窒素４kg/10a を上限として追肥

※ただし､高タンパクが予想されるほ場では止葉期の追肥を避け、開花期以降に追肥しましょう

②必要に応じて、開花期以降に窒素３kg/10a を上限として葉面散布で追肥

～ 葉面散布例：尿素 1.5%液３回 ～

※高温時の葉面散布はヤケやすいので注意

※高温時は尿素濃度を下げる（例えば１%に）

＜上位茎数 900 本/㎡以上の場合＞

開花期以降に窒素３kg/10a を上限として葉面散布で追肥

＜ＳＰＡＤによる生育診断と追肥法＞

止葉期に上位茎数と葉色計（ＳＰＡＤ）で葉色値を測定することにより、止葉期窒素吸収量が推定でき、目標収量に見合った窒素必要量を求めることができます。

測定を希望される方は、ＪＡ・普及センターまでご連絡ください。

２ 倒伏軽減対策

現状の止葉の位置や今週の平均気温が高めで推移すると予報されていることから、池田町の止葉期は５月 20 日くらい（平年は５月 23 日）と考えられます。

茎数が多く倒伏リスクが高いほ場は、植物生長調整剤の使用を検討しましょう。散布が遅れると効果が劣るため、散布時期を逃がさないよう注意してください。

また、薬害を助長する場合があるため、他剤との混用は避けましょう。

表１　植物生長調整剤の使用基準

農薬名	使用時期	10a当たり 使用量(ml)	使用回数 （以内）
エスレル10	止葉期～出穂始期	200～333	１回
カルタイムフロアブル	止葉期～出穂５日前	150	１回

３ 赤さび病にご注意ください

赤さび病は高温少雨で発病が助長されます。特に気温の影響が大きく、高温で急激にまん延します。

本年は、道央の長沼で平年より８日早い４月９日に初発が確認されていますが、芽室町（平年：５月 11 日）、訓子府（平年：５月 18 日）では未発生となっています。

池田町ではまだ見られていませんが、ほ場をよく確認し、発生に注意してください。

＜防除時期＞　止葉抽出期～穂ばらみ期　または　赤かび病との同時防除

表２　赤さび病防除時期の目安

農薬名	使用倍率 （倍）	使用時期 （収穫前）	使用回数 （以内）
ミリオネアフロアブル	4,000～8,000	７日	2

４ 赤かび病の防除

「開花期頃」に最も感染しやすく、多湿条件で多発します。１回目の適期である開花始めに雨天の恐れがある場合は、出穂揃いからの防除を検討してください。

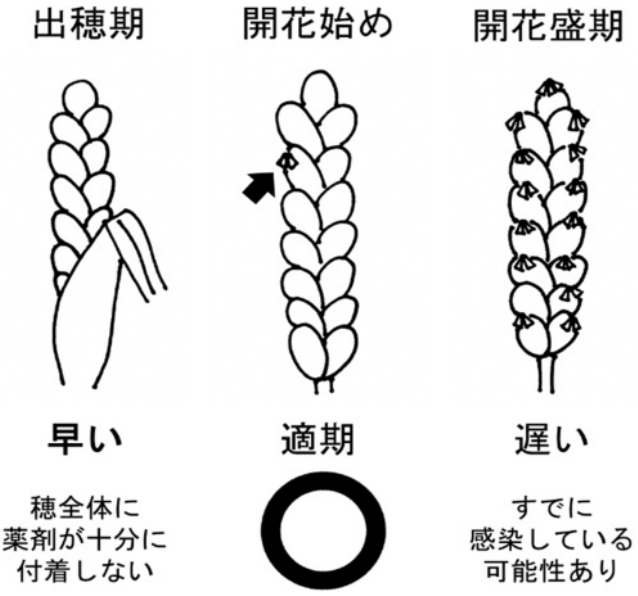


図１　赤かび病防除開始の目安

表３　赤かび病防除時期の目安

回数	防除時期の目安
1回目	出穂揃～開花始
2回目	１回目の７日後
3回目	２回目の７～10日後

【ニバーレ菌による葉枯症状】

早期に多発すると収量に影響を及ぼします。過繁茂の場合は発生を助長するため、穂だけでなく下葉部にも薬液が充分かかるようにしましょう。

表４　赤かび病の防除体系

対象病害 防除時期		農薬名	使用倍率	使用時期 （収穫前）	赤かび病	DON 低減効果	対ニバーレ 防除効果	赤さび病
赤さび	止葉期	ミリオネアフロアブル	4,000～8,000倍	７日前				●
赤かび病	１回目　開花始	プロラインフロアブル	2,000倍	７日前	●	●	●	●
	前回の７日後	ミラビスフロアブル	1,500倍	７日前	●	●	●	○
	前回の７日後	バラライカ水和剤	500倍	14日前	●	●	●	●
臨機		チルト乳剤	1,000～2,000倍	３日前	●			○/●

※適用病害　○登録、●道ガイド（登録あり）

〈てんさい〉

１ 中耕

○計画的に「カルチ」等の施工を行いましょう

地温の上昇および透排水性の改善（深耕カルチなどの施工)、土壌の膨軟化、畦間の除草のために行いましょう

○根の広がりを確認して中耕を行いましょう

生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期まで実施しましょう

○注意！！株元までの土寄せは根腐病の発生を助長します

２ 除草剤の散布

〇除草剤散布のポイントは適期処理です

気象条件や土壌水分等を考慮し、生育と雑草の発生に応じた処理に注意してください

〇直播栽培は移植栽培と登録基準が異なるので注意！！

〇直播栽培の初回散布時期は、は種後 30 日前後が目安です

直播栽培の初回散布時期は雑草発生始～発生揃（てんさい本葉２葉期）ですが、てんさいの葉齢が進んでいない幼小個体では生育が抑制される場合があるため、注意が必要です

〇風害対策のえん麦は４葉期までに除草剤処理を行いましょう

直播栽培の風害対策でえん麦を混播した場合は、えん麦の４葉期までにイネ科除草剤（ナブ乳剤、ワンサイドＰ乳剤）による処理を行ってください。処理時、てんさいの生育が小さい場合は、ナブ乳剤を使用しましょう。

３　アブラムシ類の防除

アブラムシ類の防除は早期に発生させないことが重要で、初期防除が大切です。

苗床かん注剤および直播ペレット種子内殺菌剤の残効期間は約 40～45 日程度のため、薬剤の持続期間を考慮し、アブラムシの飛び込みが多いようなほ場では防除を実施しましょう。

＜苗床かん注および直播のは種から残効期間を 45 日とした際の目安＞

〇４月 25 日直播作型のは種→６月９日頃

〇４月 29 日移植苗のかん注→６月 13 日頃

１回目のアブラムシ類の防除 **リーズン顆粒水和剤　または　カスケード乳剤＋ダントツ水和剤**

〈ばれいしょ〉

ほ場の状況や生育状況に合わせて防除等を実施しましょう。

１ 中耕・培土

「カルチ」や「畦間サブソイラ」等により土壌の膨軟化と地温の上昇を図り、通気性や透排水性の向上に努めましょう。

＜早期培土の注意点＞

〇萌芽始までに行いましょう

〇培土時の土壌水分が高い場合や培土後２日以内に降雨が予想される場合は、培土が崩れたり、ひびが入るなど、緑化いもの発生の原因となるため避けましょう

〇培土後、ばれいしょ萌芽前の適度な土壌水分がある時に、土壌処理剤を散布しましょう

２　除草剤

土壌処理剤は適度な土壌水分があるときに散布してください。

表５　ばれいしょ除草剤の使用基準（例）

農薬名	処理方法 使用時期	10a あたり 使用量	回数	主な対象雑草の効果						
				シロザ	タデ	ハコベ	ツユクサ	ナギナタコウジュ	スカシタゴボウ	1年生イネ科
センコル 水和剤	土壌処理又は雑草処理 植付直後～萌芽直前	100g	1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎～○
ロロックス	土壌処理 植付直後～萌芽前 （雑草発生始期）	100～200g	1	◎	◎	◎	△	◎	◎	○～△
バスタ液剤	雑草処理 植付前・植付後～萌芽直前 （雑草生育期）	100～200ml	1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ポルト フロアブル	イネ科雑草3～8葉期 （スズメノカタビラを除く、収穫前日まで）	200～300ml	1	×	×	×	×	×	×	◎
ナブ乳剤	イネ科雑草3～5葉期 (スズメノカタビラを除く、収穫前日まで) イネ科雑草6～8葉期 (スズメノカタビラを除く、収穫前日まで)	150～200ml 200ml	2	×	×	×	×	×	×	◎
ワンサイド P乳剤	イネ科雑草3～8葉期まで (収穫前日まで)	75～100ml	1	×	×	×	×	×	×	◎

３　ナストビハムシの防除

林地や防風林の近くで多発しやすいので注意しましょう。成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部にいたる食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を確認したら防除を行いましょう。

表６　ナストビハムシの防除例

農薬名	使用倍率	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
ゲットアウトWDG	3,000倍	７日	４回

※ナストビハムシの成虫の侵入中期～盛期(目安は6月上旬)に７～10日間隔で２回実施

〈豆類〉

豆類は温度が低いほど発芽に日数がかかるので、は種は地温が 10℃以上になる頃が目安です。また、晩霜回避を考慮したは種早限は５月下旬です。種子消毒は必ず実施しましょう。

１　は種時の注意

① は種板の用意

種子の大きさを確認し、目標とする栽植本数となるよう粒大に合ったは種板を準備しましょう。は種作業は欠株の防止に努めましょう（表７）。

表７　栽植密度の目安

区　分	栽植密度（株/10a）	畦幅×株間の目安（cm）
小豆　／　菜豆	8,300	66×18（2粒）　60×20（2粒）

② 種子消毒

ア　クルーザーＦＳ３０（種子塗沫剤）使用時の注意

〇必ず殺菌剤（チウラム 80 または粉衣用ペアーカスミンD）と併用し、処理は
クルーザー → 殺菌剤 → 根粒菌 の順としてください。

イ　クルーザーＭＡＸＸ（種子塗沫剤）使用時の注意

〇殺菌剤との併用は必要ありません。
〇クルーザーＦＳ３０より乾きにくいので、注意してください。

ウ　タネバエ対策

近年、被害は減少傾向ですが条件によっては大被害を受けることがあります。
クルーザー等で対策できますが、以下のような条件でのは種は極力避けましょう。

〇魚かす・未熟堆肥等を施用したほ場
〇は種後低温で出芽までの日数が長くなってしまう場合
〇土壌水分が高いほ場
〇牧草・緑肥をすき込んだほ場

２ 除草剤の散布

散布時期や、除草剤散布後の降雨などの影響で、薬害による生育遅延が散見されます。豆類の生育や雑草の発生状況を確認し効果的な散布に心がけましょう（表８）。

表８　豆類除草剤使用基準（例）

農薬名	処理方法	対象作物	使用時期	10a あたり 使用量	回数	主な対象雑草の効果					
						シロザ	タデ	ハコベ	一年生イネ科雑草	ナギナタコウジュ	スカシタゴボウ
ビンサイド 乳剤	土壌処理	大豆 小豆 菜豆	は種後２～５日 （雑草発生前）	330～ 400g	1	○	◎	◎	○	◎	△
コダールS水和剤		大豆 菜豆	は種後出芽前 （雑草発生前）	225～ 300ml	1	◎	○	◎	◎	◎	△
フルミオWDG ※１		大豆 菜豆	は種後出芽前 （雑草発生前）	5～10g	1	◎	◎	◎	△	―	◎
ロロックス		大豆 菜豆	は種直後 （雑草発生前）	100～ 150g	1	◎	◎	◎	○～△	◎	◎
パワーガイザー液剤　※２	土壌処理 兼雑草処理	大豆 小豆	出芽直前～出芽揃 （雑草発生始期～発生揃期）	200～ 300ml	1	◎	◎	◎	△	△	◎
		菜豆	出芽直前～出芽期 （雑草発生始期～発生揃期）								
バサグラン 液剤	雑草処理	菜豆	初生葉展開期 ～本葉抽出始期 （雑草2～3葉期）	50～ 70ml	1	◎	◎	◎	×	○	◎

※１　「フルミオＷＤＧ」は散布に用いた器具類は必ずメーカー推奨の方法にて洗浄すること。
大豆、菜豆の出芽後に使用すると薬害を生ずるので、出芽後は使用しない。
使用後著しい降雨があると初生葉に萎縮症状を生じる恐れがある。

※２「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤や他の除草剤との 10 日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避ける。

３ 中耕

除草剤の残効を考慮し、地温の上昇と雑草対策のため中耕を実施しましょう。
雑草対策のための中耕は、好天で日中の気温が上がる日が効果的です。

４ 大豆「わい化病」、菜豆（金時）「黄化病」（ジャガイモヒゲナガアブラムシ）の防除

山間部やほ場周辺に牧草地がある場合は被害の拡大が懸念されます。

クルーザーを使用していない場合や、アブラムシが多発した場合は出芽揃から初生葉展開期（目安は６月上旬）に１回目の防除が必要です。

２回目は出芽揃期の７～10 日後に防除を行いましょう。

表９　大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」の防除例

防除		農薬名	使用倍率	使用時期（収穫前）	回数（以内）
回数	時期				
1回目	出芽期～初生葉展開期	ウララＤＦ	2,000～4,000倍	７日	2回
2回目	1回目の7～10日後	ペイオフME液剤	2,000倍	７日	3回

野　菜

＜　たまねぎ　＞

１　除草剤の処理

・土壌処理剤は適度な土壌水分がある状態での散布が効果的です。ただし、散布後に激しい降雨が予想される場合は処理層が下がり、薬害を生じる恐れがあるので避けてください。

・高温時の散布（散布後、数日中に高温が予想される場合も）や２度掛けは、薬害の発生要因となります。

・保護葉（オニ皮）になる葉身が伸張する時期以降の除草剤使用は、皮が薄くなり皮むけの原因となります（早生品種で出葉数６葉、中晩生品種で出葉数７～８葉の時期：６月上旬頃）。

表１　たまねぎ除草剤の使用基準(YES!clean)

薬剤名		処理方法及び使用時期	使用回数	10a当薬量	使用上の注意、特徴
いずれか一剤の使用に限る	ｺﾞｰｺﾞｰｻﾝ乳剤	**[移植栽培]** 全面土壌散布 定植活着後（雑草発生前） 収穫30日前まで	１回	300-500ml	・一年生雑草に効果あり。 ・土壌が極端に乾燥している場合は効果が劣るので、希釈水量を多めにするか、又は降雨後に散布する。 ・激しい降雨が予想される時には使用を避ける。
		[直播栽培] 全面土壌散布 は種後～本葉2葉期 （雑草発生前）	１回	200-400ml	
	ﾓｰﾃｨﾌﾞ乳剤	**[移植栽培]** 全面土壌散布 定植活着後（雑草発生前） 定植45日後まで	１回	200-400ml	
いずれか一剤の使用に限る	ｱｸﾁﾉｰﾙB乳剤	**[移植栽培]** 雑草茎葉散布 生育期（雑草生育初期） 収穫30日前まで	２回	100-150ml	・一年生広葉雑草に効果あり。 ・夏期高温時の使用は薬害を生じる恐れがあるため、6月上旬までに散布する。
		[直播栽培] 雑草茎葉散布 １葉期～倒伏始期まで （雑草１～２葉期まで） 収穫30日前まで	３回	30-50ml	
	セレクト乳剤	雑草茎葉散布 （雑草生育期、 一年生イネ科雑草 ３～５葉期） 収穫21日前まで	３回	50-75ml	・一年生イネ科雑草に効果あり。 ・スズメノカタビラにも優れた効果を示す。

２　育苗ハウスの地力対策

・育苗ハウスは、緑肥を栽培することで、地力の向上や乾腐病などの病害の防止により、翌年以降の苗生育が改善できます。

・は種量は、緑肥用エンバクで15kg/10ａ、エンバク野生種（ヘイオーツ、サイアー）で10～15kg/10ａです。は種後２ヶ月を目安とし、結実前にすき込みましょう。

・ECが高く、塩類集積が見られる場合は灌水を行うなど、除塩対策を行いましょう。

３　病害虫防除

タンポポにはすでにアザミウマ類が寄生しています（5月19日現在）。今後、高温乾燥で推移した場合、たまねぎにも早めに発生する可能性がありますので注意してください。

（１）ネギアザミウマ・タマネギバエ

・ネギアザミウマの成虫の飛び込みは例年６月からですが、４～５月が高温・少雨で経過した場合は発生が早まります（５月下旬頃）。

・発生量を増やさないために、初発頃の防除が重要となります。ほ場を確認しながら必要に応じた防除を実施してください。

表２　たまねぎ害虫の防除薬剤例（YES!clean基準より）

防除時期	薬剤名	対象害虫	使用濃度	使用時期	使用回数	成分回数	備考
６月下旬	トクチオン乳剤	ﾈｷﾞｱｻﾞﾐｳﾏ	1,000 倍	収穫7 日前	４回以内	１回	－
7月上旬	ディアナＳＣ	ﾈｷﾞｱｻﾞﾐｳﾏ	2,500～5,000 倍	収穫前日	２回以内	１回	－
(臨機)	ダイアジノン乳剤 40	ﾀﾏﾈｷﾞﾊﾞｴ	700 倍	収穫21 日前	２回以内	１回	700～1,200 倍でネギアザミウマに登録あり

（２）白斑葉枯病

・平年の初発は６月中旬です。初発を確認次第できるだけ早く（初発の５日以内）防除しましょう。白斑葉枯病は２日以上の連続した降雨、または10㎜以上のまとまった降雨後7日間、特に平均気温18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります。

（３）べと病

・べと病は気温が 20℃以下で、高湿度条件が続くと発生しやすくなります。発病後は蔓延が早いことから、発生しやすい場合は予防防除を徹底してください。発生後は臨機防除でリドミルゴールドMZ を使用してください

表３　たまねぎ白斑葉枯病・べと病の防除例（YES!clean 基準より）

防除時期	薬剤名	使用濃度	使用時期	使用回数	白斑葉枯病	べと病	効果の発現	成分回数
6/中(移植)	フロンサイドSC	1,000～2,000 倍	収穫3日前	５回以内	○	○	予防	1
(臨機)	グリーンダイセンM 水和剤	400～600 倍	収穫3日前	５回以内	○	○	予防	1
(臨機)	リドミルゴールドMZ水和剤	500～1000 倍	収穫7日前	３回以内		○	予治	2

４　分肥

・分肥（窒素量：基肥、分肥合わせて13kg/10a以下）を考えている場合は、移植たまねぎで移植後４週目(平成28年指導参考)、直播たまねぎでは種後８週目（令和元年指導参考)が効果的です。

・過度な施肥は分球や軟腐病の多発や品質低下にもつながるので計画的に実施してください。

＜　ヤマノイモ　＞

１　除草剤の処理

・植付直後から萌芽前までに土壌処理剤を散布してください。

表４ ヤマノイモ除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法及び使用時期	10a 当薬量	使用回数	注意事項
ゴーゴーサン乳剤	全面土壌散布 植付後～萌芽前 （雑草発生前）	200～400 ml	１回	－
ロロックス	全面土壌散布 植付直後	100～200g	2回	① 植付直後と生育期をあわせて総使用回数は２回以内。 ② 砂質土で透水性のよいほ場では散布を避ける。 ③ マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるため使用しない。

２　マルチ栽培での芽やけ対策（スリットからの芽出し）

・ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ（高温障害）を防ぎましょう。

＜　かぼちゃ　＞

１　ほ場条件

・深根性で吸肥力が強く、乾燥にも強いですが、過湿には弱いため、排水対策としてサブソイラ等を施工してください。

・土壌ｐＨが低い場合は、pH6.0を目標に酸度矯正を行いましょう。

２　保温、保水対策

・「定植（は種）５～７日前」かつ「適切な土壌水分があるとき」にマルチを張り、地温と水分を確保しましょう。

・早い時期の定植は、べたがけやトンネルなどで霜対策を行いましょう。

３　直播栽培

・は種期は５/25～６/５頃が目安です。は種穴に１粒まきで、は種の深さは１～２㎝とします。欠株対策として、必ず補植用苗を用意しましょう。

※低温多湿によりタネバエが発生する場合があります。気象状況をよく見ながら、気温が低い場合はは種時期を検討しましょう。

＜　にんにく　＞

１　除けつ（芽かき）

・１株から複数本の芽が出ている場合は１本のみを残して芽かきを行いましょう。遅れると、株の生育が遅れ球肥大の妨げになるので注意しましょう。

２　摘蕾

・トウ立ちが始まったら、玉の肥大を促すために摘蕾を行ってください。摘蕾の目安は止葉と花蕾（トウ）の高さが同じくらいになった時です。

３　病害虫の防除

・今後、高温乾燥条件が続くとネギアザミウマやハダニ類の発生も懸念されますので、発生に注意してください。発生を確認したら速やかに防除をしてください。

・葉枯病は雨が多く、温度が高い時に発生が多くなり、肥料切れなど草勢が衰えた時に発生しやすくなります。ほ場を観察し、初期防除を心がけてください。

表５　にんにくの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度	使用時期	使用回数	アザミウマ類	ネギコガ	葉枯病	さび病
オルトラン水和剤	1000 倍	収穫7日前	２回以内	○	○		
ハチハチ乳剤	1000 倍	収穫7日前	２回以内	○	○		○
ｱﾐｽﾀｰ 20 ﾌﾛｱﾌﾞﾙ	2000 倍	収穫7日前	３回以内			○	○
ダコニール 1000	1000 倍	収穫7日前	６回以内			○	○
ポリベリン水和剤	1000～1500 倍	収穫3日前	３回以内			○	

周辺作物への飛散（ドリフト）防止の徹底と農作業安全

・作物の成長も進み、農薬散布の機会が増える時期です。農薬散布に際しては風向きに注意し、周辺作物への飛散防止に努めてください。

・農薬を使用するときは、必ずラベルの安全使用基準や注意事項を確認しましょう。

・農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。

・使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。

・農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

・作業機連結時の挟まれ事故、機械昇降時の落下事故に十分注意しましょう。

※薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
※薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。